



佐賀方言における用言の「語幹化」

著者	?山 百合子
雑誌名	人間文化研究所年報
号	26
ページ	169-177
発行年	2015-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000499/

佐賀方言における用言の「語幹化」

高 山 百合子

On Stem Formations of Adjectives and Verbs in Saga Dialect

Yuriko TAKAYAMA

要旨

佐賀（市）方言では、ハヤカ（早い）、リッパカ（立派だ）など形容詞・形容動詞のカ語尾が安定的に用いられている。「一カ」はその直前の形式と一体化してカ語尾形全体で語幹相当となり、活用語尾ないしは接辞を付して活用が展開している。カ語尾の〈語幹に準じるまとまりを成す働き〉（「語幹化」と称する）は、動詞についても認めることができ、タブッ（食べる）、カッ（借りる）などのラ行語末促音形は、語幹に準じるまとまりをもった形式として、使用頻度の上からも活用形の中核となっていると見ることができる。この用言の「語幹化」は、佐賀方言の肥筑方言としての特色の一つを成している。

はじめに

日本言語地図（LAJ）、および方言文法全国地図（GAL）には、九州、中でも肥筑方言域を含む西部、あるいは薩摩方言域までを含んで、この地域に特徴的に分布する方言事象が種々見られる。助詞などにも地域の特異性が認められるが、とくに用言・述語関連では、

- 1) LAJ17「おおきい」以下、形容詞およびいわゆる形容動詞のカ語尾形
- 2) LAJ46「〈いい天気〉だ」における文末指定辞を用いない「助動詞なし」の表現【注1】
- 3) GAL61「起きる」以下、動詞終止形語末ラ行音促音形（「起きる」であればオキッとなるなど）【注6】
- 4) GAL72「起きない」以下、いわゆる五段化傾向などが挙げられる。

本稿では、肥筑方言全体を視野に入れつつ、稿者の母方言である佐賀市方言（佐賀東部方言に含まれる）を主な対象として、上記1）～4）のような動詞、形容詞の活用に関わる事象を、私に「語幹化」と称する観点から捉え直してみたい。本方言では、形容詞の場合はカ語尾、動詞では語末ラ行促音形のような形態的なまとまりを核として、共通語に比べれば比較的単純な活用のしかたをしているように思われる。つまり、形容詞カ語尾や動詞語末ラ行促音形は、語形の中核として語幹に準じる機能を果たしていると見ることはできるのではないかと考える。

本稿では、佐賀市のワクを越えて佐賀東部方言、同西部方言、あるいは県下全域を対象とするような場合は「佐賀（市）方言」、「佐賀方言」と記す。

*主たるインフォーマント

- ① 稿者（高山）；女性 S.33 佐賀市北川副町生
- ② 女性 公務員 S.32 佐賀市川副町生

1. 佐賀（市）方言の形容詞活用

形容詞・形容動詞については、薩摩方言域を含む九州西部地域ではカ語尾形が優勢である。佐賀方言では、すべての形容詞・形容動詞についてカ語尾が使用されているといっても過言ではない。古代語のカリ活用に由来するといわれるカ語尾であるが、共通語の影響の強い若年層についても優位を保っているのは顕著な傾向である。

形容詞・形容動詞の活用例を〈表1〉に示す。活用形の名称は学校文法を含め通用しやすいものを掲げている。現在、形容動詞という名称はあまり使われなくなっているが、ダ（ナ）形容詞と呼べるような形態ではないので、ここでは学校文法に従っておく。議論を複雑にしすぎないために、活用形は仮名レベルで表記しておくこととする（以下同様）。

〈表1〉

（推量形）	（連用形／否定形）	（完了形）	（終止・連体形）	（条件形）
<u>ハヤカ</u> ロー	ハヨー（シテ）（ナカ）	<u>ハヤカ</u> ッタ	<u>ハヤカ</u> <u>ハヤカ</u>	<u>ハヤカ</u> ギ
<u>オカシカ</u> ロー	オカシュー（シテ）（ナカ）	<u>オカシカ</u> ッタ	<u>オカシカ</u> <u>オカシカ</u>	<u>オカシカ</u> ギ
<u>リッパカ</u> ロー	リッパニ（シテ）（ナカ）	<u>リッパカ</u> ッタ	<u>リッパカ</u> <u>リッパカ</u>	<u>リッパカ</u> ギ

連用形以外はすべて「一カ」を含む語形となる。共通語的な見方をすれば、それぞれ語幹はハヤ、オカシ、リッパということになる。だが、この「一カ」は、連用形／否定形を除く各活用形において、その直前までの形式を語幹として一体化したうえで、助詞助動詞（または接辞）を付属したりなどして各々の語形を形作っていると見ることができる。本稿では、「一カ」にこのような語幹に準じるまとまりを成す働きがあると考え、その機能を「語幹化」と称する【注2】。

「一カ」形は、喚体的表現として用いられることもある。ハヤサー、オカシサー、リッパサーという〔（通常の）語幹〕＋サーという形式の表現がなされる一方、ハヤカー、オカシカー、リッ

パカーという「一カ」を含む形式も日常的に使用される。

丁寧形にする場合、ハヤカデス、オカシカデスは共通語（ハヤイデス、オカシイデス）と同様であるが、形容動詞は共通語とは異なり、リップカデス、キレイカデス、ゲンキカデスとなる。「一カ」形は、この場合、語幹に準じるというより、体言相当の形式として機能しているというべきかもしれない。

連用形／否定形はウ音便となる。リップカ、タツシャカなど形容動詞連用形についても、リップポー、タツショーとなることがある【注3】。音便形もまた一語化した形式と捉えることができる。ただ、形容動詞の連用形／否定形の場合は、語によってはジョーヒンニ、テーネーニのように二語尾以外はないものもあり【注3】、一括りにはできない面もある。形容詞・形容動詞についてはカ語尾形が語幹であり、連用形は音便形となると見ることができる。

このような形容詞・形容動詞の活用形の展開のしかたは、神部宏泰(1980)、住田幾子(1985)、『九州方言の基礎的研究』ほか先行研究で論じられており、肥筑方言・薩摩方言域を含む九州西部全域で見られる。ただ、カ語尾の分布に関してその内部状況は単純ではなく、住田(1985)は、

- (1) 形容詞・形容動詞ともにカ語尾の存する地域
- (2) 形容詞のカ語尾が存する地域
- (3) ヨカ（よい）・ナカ（ない）の二語のみが存する地域
- (4) ヨカのみが存する地域

に大きく分類することができるとする。それに続けて、

いっぽう、終止形・連体形以外の「カリ活用」の各活用形の分布領域は、西半域はもとより東半域をもおおう九州一円にわたる。「カリ活用」を温存する九州方言にあって、その終止形・連体形の存立如何は、九州の西部と東部との方言事情の差異を示すものとなる。

と、九州方言における「カリ活用」温存の重要性を指摘する。

佐賀方言が、上記の分類のうち(1)に属することについては疑問の余地はない。「変カ」「変ナカ」両様があるといったゆれを含め、佐賀方言は典型的なカ語尾の分布領域である。それだけ形容詞・形容動詞においては、カ語尾形、音便形といったまとまりの度合いの強い形式を「語幹化」して活用するあり方を捉えやすいと言える。

このカ語尾をも含め、神部(1992)は、九州西部方言の文法面での「体言化傾向」を指摘している(p13~15)。「体言化傾向」とは、文表現の末尾、あるいは要所を、とかく体言、あるいは体言的発想によって叙述しようとする傾向だとする。アカカ・ウレシカのカ語尾も体言性の接辞的な性質を帯び、カ語尾形容詞全体が、体言的な機能を持つと述べている。本稿でいう「語幹化」は、神部(1992)の指摘する「体言化傾向」に含まれるとも考えられるが、まずは、用言、述部について考察をする都合上、「語幹化」という捉え方をしておくことも有効であると考えられる。

以上、佐賀方言の形容詞・形容動詞について「語幹化」の傾向を見てきた。

2. 佐賀（市）方言の指定辞

前述2) LAJ46「〈いい天気〉だ」における文末表現については、佐賀、長崎、熊本には指定辞を用いない「助動詞なし」の地域が分布している。稿者もインフォーマントとしては同じく「助動詞なし」となり、「〈いい天気〉だ」の方言訳には、とくに指定辞「だ」の部分に困難を覚える。いっぽう「キューワ、テンキンヨカ（きょうは天気がい）」という語順であれば、ごく自然な表現であると感じられる。その場合、この文には半上昇とも言うべきイントネーションが加わってよく、そこで聞き手向けの判断・確認といった情意が喚体句的に表明される。

神部（1981）は、肥筑方言において「[ヂャ]による断定作用を抑制してきたものは・・・（中略）・・・当方言の基質の一部を成すとみられる「体言性」—表現を体言化する傾向—に外ならない」と述べる。一連の神部氏のご指摘は首肯できる部分が多いと考える。「キューワテンキンヨカ」のような文のあり方を勘案すると、すでに神部（1980）、住田（1985）で指摘するように、カ語尾に陳述機能を認めることができるように思われる。文としては係り結びのような喚体句的なあり方と言えらる。

3. 佐賀（市）方言の動詞活用

次に動詞について「語幹化」との関連から検討していく。

本方言では、いわゆる五段、上一段、下二段活用と、クル、スルの特殊活用が行われている。また、上一段、下二段動詞は五段活用化の傾向が強いと、先行研究では指摘されている。

動詞、助動詞の語末ルは、佐賀東部方言ではすべて促音になり、佐賀西部方言では二段動詞、クル、スルは促音になるが、五段動詞では長音になる【注4】。このような活用語の語末音、とくにラ行音に関わる音変化は、程度の差はあれ、九州方言全域に認められる。

〈表2〉に佐賀市方言の動詞活用データを示す。内省した結果だけでなく、意図的に子音語幹動詞連用形（音便形）に年配者、老年層の使用語形を一部入れた。語例の挙げ方に偏りはあるかと思うが、音便形を示すため子音語幹動詞を多く入れている。語末促音形は斜字で示した。

〈表2〉より、母音語幹動詞（一、二段動詞）、ラ行五段動詞、および「来る」「する」の終止形、条件形、ラ行五段動詞では、さらに連用形（テ形）で語末促音形となる。

そもそもラ行五段動詞は、所属語彙数からしてかなりの数を有する。加えて連用形には、レル・ラレル、セル・サセル、シヨル・シトル他、末尾ラ行音のいわゆる助動詞、さらには補助動詞が接続することが少なくなく、動詞活用形全体の中で末尾ないしは語幹末に促音形が据わることは相当にあるのではないだろうか。母語話者の意識としても、語末促音形は使用頻度がかなり高いだろうという感触を持っている。

未然形末尾の撥音、意志形の長音も、語音としては促音と近似した性質のものと言え、一語化の目印としての機能を認めることができるように思われる。加えて連用形の音便形である。形容

〈表2〉

〔佐賀市方言動詞活用データ〕

	終止・連体形	未然形	意志形	連用形	条件形	命令形
母音語幹						
見る	ミッ	ミン／ミラン	ミュー／ミロー	ミテ	ミッギ	ミロ／ミレ
似る・煮る	ニッ	ニン／ニラン	ニロー	ニテ	ニッギ	ニロ／ニレ
着る	キッ	キン／キラン	キロー	キテ	キッギ	キレ
起きる	オキッ	オキン／オキラン	オキュー／オキロー	オキテ	オキッギ	オキロ／オキレ
出る	ヅッ	デン／デラン	ヂュー／デロー	デテ	ヅッギ	デロ
食べる	タブッ	タベン	タビュー	タバテ	タブッギ	タバロ
捨てる	ウシツッ	ウシテン	ウシチュー	ウシテテ	ウシツッギ	ウシテロ
子音語幹						
置く	オク	オカン	オコー	ウェーテ	オクギ	オケ
書く	カク	カカン	カコー	キヤーテ	カクギ	カケ
行く	イク	イカン	イコー	イッテ	イクギ	イケ
巻く	マク	マカン	マコー	ミヤーテ	マクギ	マケ
飛ぶ	トブ	トバン	トボー	トーデ	トブギ	トベ
読む	ヨム	ヨマン	ヨモー	ヨーデ	ヨムギ	ヨメ
死ぬ	シン	シナン	シノー	シンデ	シンギ	シネ
指す	サス	ササン	サソー	シャーテ	サスギ	サセ
消す	ケス	ケサン	ケソー	(ケシテ)	ケスギ	ケセ
越す	コス	コサン	コソー	(コシテ)	コスギ	コセ
貸す	カス	カサン	カソー	(カシテ)	カスギ	カセ
洗う	アルー	アラワン	アラオー	アルーテ	アラウギ	アラエ
借る	カッ	カラン	カロー	カッテ	カッギ	カレ
取る	トッ	トラン	トロー	トッテ	トッギ	トレ
折る	オッ	オラン	オロー	オッテ	オッギ	オレ
切る	キッ	キラン	キロー	キッテ	キッギ	キレ
来る	クッ	コン	クー／キュー	キテ	クッギ	ケー／コイ
する	スッ	セン	シュー	シテ	スッギ	セロ

詞の活用においても言及したとおり、音便形は語幹に準じる形態的なまとまりを成していると言える。

動詞についても、丁寧形にする場合を考えると、

「見る」：ミッデス ミランデス ミテデスネ ミタデス ミッギデスネ

「書く」：カクデス カカンデス キヤーテデスネ カイタデス カクギデスネ

などのように、各活用形にデスがそのまま接続する場合が少なくない。方言敬語の使用される文脈の中、とくに中高年、老年層において丁寧表現がこのようなマスを使わない形式になることもごく普通のことであり、共通語との差異を感じさせる。この場合は、各活用形自体が「語幹化」の傾向を示していると捉えられることになる。

4. 五段化傾向について

母音語幹動詞（一、二段動詞）と、借ル、取ルなど子音語幹・ラ行五段動詞の活用を比較すると、ラ行五段動詞が連用形で促音便になること以外は、もともと語音構造に似通う要素が少なくない。その似通いが前提であり、その上さらにラ行五段動詞が数の上で圧倒しているとなれば、一、二段動詞が五段化していくのは必然とも言えるのではないだろうか。途中で二段活用が一段化する過程をあえて入れる必要もないように思われる。以下の迫野虔徳（2012）の指摘は妥当なものと考えられる。

九州方言以外の多くの方言では、二段活用の一段化などによって〈結果的〉に活用の型が整理統合されていったという面が強いが、九州方言では、このような自然な型の統合を受ける前に、方言としての「単純化」への強い欲求が働いて、活用の型の再編に動いたように思われる。九州方言には、明確な形では二段活用の一段化の形跡はない。

（『第五節 九州方言の動詞の活用』p194【注5】）

さらに詳細に考える必要があるが、五段化を引き起こす契機のひとつは、一、二段動詞とラ行五段動詞との似通いであり、その中で語幹に準じるまとまりを示す語末促音形の存在は小さくなかったのではないかと考える。

『九州方言の基礎的研究』『各県別解説』その他によれば、動詞の五段化傾向についても、形容詞カ語尾同様、地域による濃淡がある。例えば熊本方言では、一・二段動詞の五段化は、少年から老年に至るまで浸透しており、連用形に当たる起キッタ・見ツタが広く用いられ、サ変命令形セレに及んでいる（P231）。鹿児島方言でも起キッタ・見ツタが使用される。終止形は佐賀方言と同じく起キッ・見ッとなる鹿児島方言の場合、起キタ・見タはほとんど使われないうのである（P240）。陣内正敬（1997）によれば、筑後方言も起キッタである（P23）。起キッ・見ッは本稿でいう「語幹」の役割を果たしていると思われることができる。この鹿児島方言などのあり方からは、佐賀方言から連続していると見ることもできる。

陣内（1981）は、旧藩時代佐賀藩領であった諫早の動詞活用を次のように記述している。

「取る」：トッ/トル トラン トイユッ トツタ トロー トレバ トレ
「見る」：ミッ/ミル ミン/ミラン ミーユッ/ミリユッ ミタ ミュー/ミロー ミレバ ミレ
「寝る」：ヌッ/ヌル ネン/ネラン ネーユッ/ネリユッ ネタ ニュー/ネロー ネレバ ネレ

一部抜粋して仮名書きで示した。上掲〈表2〉「佐賀市方言動詞活用データ」と比較すると、陣内（1981）で指摘するとおり、両方言はよく似ているが、条件形（陣内（1981）では「仮定形」）、命令形で諫早方言の方が五段化が進んでいるといえる。同論文では語幹を保持しようとする動き

の中にじつは2つの異なる方向があり、1つは同形を維持しようとする動き、いま1つは語幹を揃えようとする（この場合は「子音語幹」に、つまり五段化しようとする）動きであることを論じている。仮名書きすることで「子音語幹」化の動きは見えづらくなるが、たしかに2つの方向の動きが見て取れる。佐賀市方言の場合は諫早方言と比べて前者、つまり同形を維持しようとする動きが強いと見ることができる。同形とは、この場合ラ行語末促音形を指している。

まとめ・おわりに

以上、佐賀市方言の形容詞・形容動詞カ語尾を糸口に、動詞の語末促音形に注目して「語幹化」という視点から考察した。本方言には、形容詞・形容動詞および動詞のいずれにも、カ語尾や語末促音のような目印をもつとまり、あるいは音便化した形式を語形の中核に据えて比較的単純な活用をするような傾向が認められた。それを本稿では「語幹化」と捉えたが、これは神部(1980) (1992)の「体言化傾向」と通じる面があるように思われる。また、迫野(2012)の指摘する活用型の「単純化」は、活用パターンについての議論であろうが、佐賀市方言における活用は、共通語などと比べるとかなり単純な語形変化をしているように見える。

本稿で掲げた「語幹化」という捉え方がどのくらい有効か、さらに東部方言を含めた九州方言全体について考察する必要がある。各地の活用のパターンを、活用形の語形とも詳細に照らし合わせながら検討することで、明らかになることが少なからずあるのでないだろうか。

以上の考察を通して、佐賀市方言は、徹底して形容詞カ語尾を用い、動詞については、二段活用を保持し、五段化もある程度進んでいる肥筑方言らしい方言、肥筑方言の一典型といえるのではないかと感じた。動詞ラ行語末促音の、本稿で言う「語幹化」が機能するのも、肥筑方言らしさの表れのように思われる。

【注】

1. 山形から新潟にかけて、徳島、沖縄などにも、少しまとまった分布が見られる。
2. 「語幹化」という名称は、小松英雄(2014)における動詞音便形に関する次のような言及などから示唆を受けたものである。
…サイテ、トンデなどのサイ、トンなどは動詞の語幹に準じる機能を果たしており、それに後接するテ、タ、ダなどは活用語尾に準じる機能を果たしていることになる (p200)。
3. 小野志真男(1983) P106参照。
4. 佐賀方言では、唐津、鳥栖地区を除いて、一般的に語中尾のラ行音子音の脱落、変化が目立つ。
リ→イ；クイ(栗)、クスイ(薬)、ヤッパイ(やはり)、フィダス(降り出す)
レ→イ；コイ(これ)、ソイ(これ)、オイ(おれ)、ダイ(だれ)
語頭についても次のような例がある。
ジンゴ(りんご)、ジッパカ(立派だ)、ジクーカ(利口だ)

——以上、小野志真男（1983）P93、99～100参照。

5. 迫野虔徳（2012）「第二章 九州・琉球文献資料と方言」より。初出：『語文研究』85号、1998年6月
6. 「内破音」という捉え方もされる。本稿ではカナ書きしていることもあり、「語末促音形」としておく。

【引用・参考文献】

1. 砂土原果（1957）「鹿児島（市）方言動詞の素描」（『国語学』31号）
2. 神部宏泰（1967）「九州方言における文末詞「バイ」「タイ」について」（『熊本女子大国語国文学論文集』5号）
3. 同上（1980）「九州西部方言の形容語—カ語尾形容詞を中心に—」（広島大学教育学部『国語教育研究』26号上）
4. 同上（1981）「九州肥筑方言の断定法—その史的推移と特性—」（『兵庫教育大研究紀要』1号）
5. 同上（1992）『九州方言の表現論的研究』和泉書院
6. 志津田藤四郎（1971）『佐賀の方言 下巻・総説編』佐賀新聞社
7. 小松英雄（1975）「音便機能考」（『国語学』101号）
8. 陣内正敬（1981）「九州方言に見られる母音語幹動詞のラ行子音語幹化について」（『九大言語学研究室報告2号』）
9. 小野志真男（1983）「佐賀県の方言」（『講座方言学9・九州の方言』所収）国書刊行会
10. 同上（1991）「九州方言の各県別解説：佐賀」（『九州方言の基礎的研究』所収）
11. 九州方言学会（1991）『九州方言の基礎的研究』風間書房
12. 住田幾子（1983）「「ゴト・ゴタル」に見る九州方言の基質」（広島大学『国文学攷』98号）
13. 同上（1985）「九州方言における「カリ活用」の現況」（梅光女学院大学『日本文学研究』21号）
14. 同上（1986）「肥筑方言に見られる心情訴え文について」（梅光女学院大学『日本文学研究』22号）
15. 坂口至他（1998）『日本のことばシリーズ42長崎県のことば』明治書院
16. 井上史雄・篠崎晃一・小林 隆・大西拓一郎編（1999）『日本列島方言叢書24 九州方言考②』ゆまに書房
17. 藤田勝良他（2003）『日本のことばシリーズ41佐賀県のことば』明治書院
18. 有元光彦（2007）『九州西部方言動詞テ形における形態音韻論現象の研究』ひつじ書房
19. 丹羽一彌編（2012）『日本語はどのような膠着語か—用言複合体の研究—』笠間書院
20. 迫野虔徳（2012）『方言史と日本語史』清文堂
21. 三原健一・仁田義雄編（2012）『活用論の前線』くろしお出版
22. 小松英雄（2014）『日本語を動的にとらえる—ことばは使い手が進化させる—』笠間書院 p200
23. 高山百合子（2015）「佐賀（市）方言の動詞活用—「語幹化」の視点から—」（筑紫日本語研究会『筑

紫日本語研究2014』)

24. 藤田勝良（2003）「現代日本語動詞の活用の特質と体系」（『佐賀大國文』31号）
25. 陣内正敬（1997）『日本のことばシリーズ40・福岡県のことば』編集代表：平山輝男（明治書院）

※ 本研究は、JSPS 科研費（基盤研究(C)課題番号26370553）の助成を受けたものです。

（たかやま ゆりこ：現代教養学科 教授）